

『うつほ物語』 後半部における子ども

——前半部との関係から——

富澤 萌未

〔キーワード…①過去 ②反復 ③源仲頼 ④立坊争い ⑤宰相の娘腹の小君〕

はじめに

『うつほ物語』の前半部⁽¹⁾は、父母のいない人物たちがあて宮に求婚し、「吹上・下」巻において活躍すること、社会的に位置づけられる物語である。しかし、同時にあて宮への執着によって、求婚者、特に源実忠や源仲頼はもといた妻子たちを忘れてしまう。こうした構造は、俊蔭の娘への寵愛により兼雅に忘れられた妻子たちの物語と対応している。これに対して後半部では、以上のような父に忘れられた子どもたち⁽²⁾を救済してゆく物語となっている。父母がおらず分散されていた人物たちは、あて宮への求婚の場を磁場として、その場に集合する。また、父に忘れられた子どもたちは後半部においてそれぞれの親族に引き取られる。『うつ

「物語」は人物たちが、分散↓収束↓分散↓収束する物語だといえる⁽³⁾。

それでは、後半部において、子どもたちがそれぞれの「家」⁽⁴⁾に引き取られる物語は、どのように語られるのだろうか。たとえば、「国譲」上中下巻は、あて宮腹の第一皇子と梨壺腹の第三皇子の立坊をめぐる物語を中心としている。この立坊争いは、いわば子どもをめぐる争いであるが、「家」や氏族の価値観によって物語が展開している。そして、それは過去を捉えなおし、あらたに現在、未来を構築していこうとする『うつほ物語』後半部の問題と連続している。

「蔵開」上中巻では、仲忠が蔵を開き、そこにある先祖の書物を帝に進講することで、俊蔭の父母の代から続く「家」を再構成した。「蔵開・下」巻では、兼雅の妻子たちが兼雅に引き取られた。続く「国譲・中」巻では、実忠のあて宮への求婚によつて犠牲になった実忠が、北の方と娘の袖君と再会する。「蔵開・下」巻における兼雅の妻子引き取りは仲忠、「国譲・下」巻における実忠と北の方・袖君引き取りは、源季明・実正・あて宮が中心となつて行なっている。あて宮は、「蔵開・上」巻において、求婚によつて犠牲になった仲澄を思い出し供養しようともしている。『うつほ物語』の後半部では、前半部において犠牲になった人々を救済しようとする動きがみられるのである。

こうした動きで注目すべきなのは、あたかも前半部を繰り返そうとするような動きである。猪川優子氏は、「国譲・下」巻において女二の宮を盗み出そうとする祐澄・近澄は、あて宮求婚譚における暴力性という負の遺産を受け継いだのだと論じている⁽⁵⁾。こうした前半部の話型を繰り返し、あらたに過去を捉え返したかのような場面が『うつほ物語』の後半部では散見される。本論では、前半部の反復とみられる後半部の場面のなかで、特に子どもに関する場面に注目し、『うつほ物語』後半部の問題を考えてゆきたい。

一、吹上訪問と水尾訪問

ではまず、妻子たちを残したまま出家してしまった仲頼の物語を見てゆきたい。立坊争いの間隙を縫うようにして描かれる「国譲・下」巻における仲忠や涼、行正、藤英、忠こそによる水尾訪問は、あて宮求婚譚の吹上訪問との類似点が多い。まず、吹上訪問の時と同様、清原松方・藤原近正が連れだって水尾に訪れている点、吹上訪問との類似点の一つである。人々は、水尾を訪れた夕暮に、過去を回想する歌を唱和する。

①吹上に誘ひし友の山深く訪ねて君を見るが悲しさ
「山籠りも、今日は」などて、

②谷風の吹上ぞ我も思ほゆる山の錦に円居せる今日
大将も、

百敷の昔の友を見に来れば嵐の風も錦をぞ敷く
中納言の君、

君をのみ尋ねて今は秋山も紅葉も深くなりけるかな
右大弁、昔の藤英なりし火影姿思ひて、

七夕の会ふ夜ぞ我も君を見し誰も心のめづらしきかな
律師、

限りなく憂かりし身だにあり果てぬ山にて君が思ひをぞ知る

中将、

君をだになしと嘆きし百敷にありし世さへも変はりぬるかな

右馬助、

君により時雨るる袖の深き色を折れる紅葉と里人や見む

時蔭、

いにしへは君が衣に見えし色の今は山辺に散り迷ふかな

とて、中将は琵琶、山籠り箏の琴、権の頭琴、近正和琴、時蔭横笛、右大将の御もとなる縫殿頭笙の笛、また、それらが中に箏築吹く者と吹き合はせて、異人々は唱歌し、歌歌ひ、夜一夜遊び給ふ。

(国譲・下 七七一〜七七三)

過去を回想している歌が多いが、特に傍線部①の歌と、傍線部②の歌は、吹上訪問を思い出している。最初の歌は、清原松方が詠じたものである。昔は吹上に誘い連れ立っていた仲頼と、今となっては山深く訪ねて会うしかないことを嘆いている。それに対して仲頼も、すでに出家してしまった今日、吹上のことを思い出すと詠んでいる。二つの歌に共通するのは、連れ立って吹上に訪問した昔と、仲頼がすでに出家してしまった今を対比していることである。続く歌も昔と今を対比している歌が多い。そして、歌を詠みながら人々は傍線部③のように、楽器を演奏しそれに唱和しながら夜を過ごす。

仲頼を訪ねたことよって、人々は仲頼が出家する以前を想起している。注意したいのは、先ほどの傍線部③のように、人々が楽器を演奏していることである。そうした場面は翌日の夜の場面にもみられる。

夜更くるまでは、詩誦じ、晝方になりて、風いとあはれに、木の葉雨のごとくに降るほどに、律師、陀羅尼読み給ふ。大将、いみじく愛で給ひて、箏の琴弾き合はせ給ふ。面白きこと限りなし。山のも里のも、皆、涙落とさぬはなし。しばし遊ばせ給ひて、山籠り、常のことにて陀羅尼を読み給ふ。中納言、山守召して、調べさせ給ふ。かくて、しばしありて、君たち、もろ声に詩遊び給ふ。

(国譲・下 七七三)

京から離れた場所に赴き、楽器を演奏するという点でも水尾訪問の段は吹上訪問の段と共通する。吹上を訪問した際も、人々は楽器の演奏に興じていた。

・かくて、物の声掻き合はせ、ある限り、声合はせ、調子合はせつつ遊び暮らす。少将、「御前にて、節会（せつゑ）ことに、惜しむ手なく仕うまつる折々も、殊に、かかる物の音などは聞こえぬを、いとめづらかにもあるかな。一所に遊ばす御琴の音に、多くの人の手なむまさりぬる」。行正、「右大将殿の、春日にてし給ひし遊びをなむ、めづらしき心地せし。それにも、今日は、こよなくまさりてなむ思ほゆる」など言ふ。

(吹上・上 二五二)

・かくて、物の音など掻き立て、例の、遊びなど振る舞ひて、詩作りなどしつつ、読み上げて、琴に合はせて、もろ声に誦じ給ふ。かかるに、少将、かく、面白き所に、ある限りの上手集ひて、世の一の琴・笛、吹き立て、掻き鳴らしつつ、清らを尽くして遊びわたれど、病につき、伏し沈みて思ひしことは、慰むべくもあらず、嘆きわたるに、花誘ふ風も心すぐく吹きて

(吹上・上 二五五)

・かくて、例の、君たちは琴弾き、下部・童、笛吹き交はす。

(吹上・上 二五八)

・例の、物の音ども掻き合はせて、かはらけ度々になりて、君たち、大和歌遊ばす。(吹上・上 二六〇)

・かくて、物の音など、惜しむ手なく掻き合はせて遊ばしつ、日高くなりゆけば (吹上・上 二六九)

さらに、吹上訪問の際は、神奈備種松が訪れた人々に多くのものを贈っていたが、この水尾訪問の際も種松は仲頼に粥の料などさまざまなもの贈っている。

かくて、日やうやう晴れもてゆくほどに、種松、山籠りの御料に、粥の料・合はせ、いと清らに調じて、馬どもに負せて、乾飯、馬二十ばかりに負せて、布の襖、綿厚く入れて、いと多う持たせ、長櫃どもに飯入れさせ、酒、樽に入れて持たせてまうでて、山臥ども召し集めて、飯・酒食はせ、乾飯・襖一つづつ取らす。

(国譲・下 七七四)

もちろん、種松が贈りものをするのは、この場面だけではないが、この場面は吹上を思い出す場面の延長線上にあるため、吹上を想起させる場面となっているように思われる。この贈り物は、最終的に仲頼の妻のもとに渡ることになるが、それについては後述する。

水尾訪問が吹上訪問の際と大きく異なるのは、訪問している人物たちの中に、忠こそ・藤英が含まれていることである。二人が加わることで、水尾の演奏の場は、あて宮への求婚を思い出す場となる。

出づとせし身だに離れぬ火の家を君水尾にいかですむらむ

山籠り、

煙立つ家は思ひの苦しさに身も消ちがてら入れる水尾

大将、

ここにかくあるどち誰か燃えざりし袖の水脈にも温みやはせし

中納言、

人よりは我ぞ煙の中なりし今も消えねどえやは出でける

弁殿、

夜を暗み螢求めしわが身だに消えし思ひの目に煙りつつ

中将、

燃えわたる火のほとりにはありながら乾かぬものは袖にぞありける

などのたまひつつ、遊び明かし給ふ。

(国譲・下 七七三～七七四)

楽器の演奏に興じる場面のすぐ後に続く唱和歌は、あて宮へ求婚していた過去を回想する歌が続く。最初は、どうして水尾に澄みきったように住んでいるのかと問う忠こそその歌である。それに対して仲頼は、あて宮への「思ひの苦しき」によつて燃えた我が身を消すために水尾に隠棲したのだと答える。仲忠は、ここにいる誰もがあて宮への思いに身を焦がしたのだと詠む。次の涼の歌も、出家はできなかつたが、あて宮への思いによつていまだに燃えた火が消えないと詠む。藤英も、あて宮を思っていた昔を思い出し、消えたはずの恋の炎で目が煙ると詠む。最後に、行正は、いまだに涙で袖を濡らしているのだと詠んでいる。ここに集まつた者は皆、今もなおあて宮への思いが消えていないという歌を詠み、あて宮へ求婚していた昔を共有している。立場は変

わってしまっただが、心は昔と変わらないのだと確認し合っているのだと考えられる。

先ほど引用した唱和歌の場面には松方・近正も加わっていた。だが、この場面はあて宮への求婚者たちの唱和歌だけで構成されており、松方や近正の歌はみられない。歌を詠じる人物が限られることで、よりあて宮へ求婚していた昔への追憶が強調される。それと同時に、歌を詠んでいる忠こそ、仲頼、仲忠、涼、藤英、行正たちが活躍した「吹上・下」巻を思い起こさせもする構成となっているともいえるだろう。「吹上・下」巻は誕生を父に認知されていなかった涼がついに嵯峨院と再会する巻である。と同時に父母のいなかった人物たち、とりわけ藤英や忠こそが社会的に認められてゆく巻となっている⁽⁶⁾。

そのような「吹上・下」巻の時空を生成したのが、「吹上・上」巻における吹上訪問である。涼は、母に先立たれ父嵯峨院にその誕生が知られることもないまま、祖父母の種松夫妻に吹上の地で、才を持つ人物として育てられた。吹上を訪問した人々は、涼を賞賛し、その地で埋もれさせておくことを惜しむ。これらの唱和歌に用いられる語は、漢籍を出典とするものが多いと指摘されている⁽⁷⁾。門澤功成氏は、「吹上・上」巻において唱和歌や景物に融合する形で仏典・漢籍を典拠とする語が用いられることで、「涼の比類なき人物像とその雌伏に対する同情が一座の人々の共感として広がっていく」と論じている⁽⁸⁾。「吹上・下」巻では、涼が本来こうした場所にいるべきではないという認識が、唱和歌という形式で共有されてゆく。そして、この様子は都へと伝わり、涼は上京後、父嵯峨院に認められることとなる。また、「吹上・上」巻で行なわれた宴によって、続く「吹上・下」巻における吹上の重陽の宴、神泉苑の紅葉の賀は行なわれる。

水尾訪問の最後には仲頼の子どもたちの進退が語られる。

山籠り、「さだに御覽じなさば、いとうれしく、『仏の御徳』となむ。この侍る童部も、母とて侍る、身一つだに侍りがたげに承れば、『ここに召し集めて、松の葉をも、苔の衣をも、もろともにこそは』と思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍るを、『童部は、いかで、宮仕へも仕うまつらせむ』と思ひ給ふれど、親は頼りなく侍れば、『いかでかは』とてなむ」。大将、「『いづこに、いかにせむ』とか思はず。せむやうをのたまへ。かの叔母君に預け奉りて、一向にこのことを後見奉らむ」。さは、いとうれしきことなむ。昔だに、いと御前に候ひがたかりし上には、え候はじ。『今居給はむ春宮に奉らむ』となむ。(中略)「さらば、このあこたちは、今日も、いざかし」。山籠り、「今年ばかりは、物の音少し聞き知らせ侍りて、年返りて奉らせむ」

(国譲・下 七七六―七七七)

仲頼は、出家した後、子どもたちの母在原忠保の娘が貧しいことを理由に、子どもたちを自分のいる水尾に引き取り、楽器を習得させようとした(蔵開・下 五九〇、国譲・下 七七二)。しかし、自分は頼りない身の上なので、子どもたちに宮仕えさせたくてもできないと嘆く。それに対して仲忠は、子どもたちの叔母にあたる仲頼の妹に子どもたちを預けて自分が後見役をしようとして出ている。仲頼は「いとうれしきこと」と喜び、女子を次期東宮に入内させたいと言う。今日にでも引き取ろうとする仲忠の申し出に対して、仲頼はもう少し楽器の演奏を習得できたらと答える。

仲忠たちが帰った後、仲頼は先に種松が用意した粥の料を煮て食べるように北の方に贈る。

中納言の、「粥の料に」とてありし物をば、子どもの母君のもとに遣り給ふとて、御文には、「日ごろは、

これかれ、人々ものし給へれば、騒がしくてなむ。(中略)さては、これは、『粥の料』とて、人の賜へりし。そこにて煮させ給へ。子どもの宿直物、綿多く入れて賜へ。恋ひ聞こゆれど、『しばし、琴も習はさむ』とてなむ』とて奉れ給ふ。女君、見給ひて、いみじく泣きて、御返り、「承りぬ。(中略)この粥の料は、のたまへるやうに」と書きて、奉り給ひつ。絹・綿を見れば、いと多かり。親に奉り給ふ。按察使の君のもとに、箱に入れて奉り給ふ。御達も、皆賜はりて、引き散らして、むしりなどす。女君、「昔も今も、この吹上の君の御贈りをこそ、豊かに見れ」とのたまふ。

(国譲・下 七七九)

「粥の料」には、傍線部のように、子どもの宿直の衣に綿を多く入れて送って欲しいと依頼し、子どもたちが母を恋い慕っていることを報告する文が添えられていた。それを見た北の方は、涙を流し、種松の用意した涼の贈り物を見て、昔も今も涼の贈り物は豪華だと言う。

仲頼たちが吹上を訪ねたことで、涼は嵯峨院と対面し、源氏として活躍したように、仲頼の子どもたちもまた、仲忠たちが水尾を訪問したことで仲忠の後見を得た。しかし、先の仲頼の妻の注目した涼からの贈り物の役割は変化している。「吹上・上」巻において種松・涼が訪問者たちに贈った物は、都の貴顕に配られ、涼の名を広めさせた。だが、今回の贈り物はそのような役割を果たしてはおらず、仲頼・子どもたちと、北の方が離れて暮らしていることを示すものとなっている。仲頼の北の方が言うように、涼の贈り物は昔も今も豪華で変わらないからこそ、その変化が際立っている。

あて宮腹の新東宮が参内する日、仲頼の北の方が、晴れがましい仲忠・涼・藤英・行正の姿を見て、仲頼が出家していなかったらこのようであっただろうにと嘆くように(国譲・下 七九六〜七九七)、すでに出家し

てしまった仲頼が都に戻ることはない。仲頼がいないからこそ、仲忠が後見を努めることになるのだが、分散してしまった「家」は元に戻ることはなく、その代わりの人物がそれを補償しなければならぬ。

あて宮の働きかけによって、仲頼の妻の父である在原忠保も修理大夫に就任した。

・司召にもなりぬ。女御奏し給ふ、「宮内卿忠保の朝臣は、よき官は、え賜はるまじき人にや侍らむ」。

(国譲・下 八〇一)

・かの女御こそ、度々申されけれ。

(国譲・下八〇二)

あて宮は、忠保が良い司を得るように何度も働きかけた。仲忠と同様、あて宮も過去の喪失を解決しようとしている(9)。仲頼が出家する前に戻れないように、過去は完全に解決はしない。だが、過去を思い出し、捉え返すことはできる。仲頼の子どもたちは、将来仲忠の庇護下に置かれることが予想される。水尾訪問は、吹上訪問という過去を巧みに引用している。しかし、その過去を取り戻すことはできないという認識が水尾訪問にはあり、その点で吹上訪問とは大きく異なっている。

二、立坊争い

次に、同じく前半部の反復のようにみえる立坊争いをめぐる藤原忠雅と六の君とその子どもたちの物語を確認する。忠雅と六の君の關係は、「国譲・下」巻において立坊争いが激化し、后宮が忠雅を自らの娘女三の宮

の婿としようとすることで亀裂が生じる。「国譲・下」巻での冒頭、後の宮は、太政大臣である忠雅や右大臣兼雅を呼び寄せる。後の宮は何としても藤原氏側である梨壺腹の三の皇子を立坊させたいと主張する。それに対する兼雅の回答が次の場面である。

右のおとど、「いとも尊く、かく思はしめさせ給ひける。かく仰せ承るはうれしけれど、ここに五人候ふ人は、四人は、皆犬に侍り。兼雅も、この朝臣侍れば、思ひ捨つべきにも侍らず。降り居おはしますべき帝の、あまたの皇子たちの母にて候ひ給ふも、代を継ぎ給ふべき君の、二つなく思ほして、三所の君持ち、近う候ひ給ふも、同じ人の娘なり。この御仲ども、疎かなるにあらず。いかが、命を懸け給へるやうなり。この太政大臣、この子どもの母まかり隠れて後、この女御の一つ腹の持給びて、また、一日一夜、他の所をなむ知り給はざる。その腹に、子四人侍なり。かの大納言の朝臣は、その妹の八にあたるをなむ持て侍るなる。それ、また、子二人、また、今日明日にて侍り。それ、去年の冬、『はかなき人に物言ひ触れて侍り』とてまかり去りて、親のもとに侍りければ、子の幼きを取り持てなむ、せむ方なくともてわび給ひけるが、からうして、この頃なむ、『あからさまに』など言ひて、渡りて侍るなる。宰相の朝臣も、兼雅が姉の腹なり。それも、子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中の君にして、もてかしづき侍る人につきて侍り。子に、限りなく愛しうする女子侍り。またもあるやう侍なり。かくのごと、手を組みたるやうに行き交じり、この中に、いささか疎かならず、命を限りて侍るに、『かかることをなむあひ定むる』と聞き侍りなば、この娘どもをも取り放ちて、帝にも、かれこれにも、またあひ見せ奉るべきにも侍らず（後略）」と聞こえ給へば。

(国譲・下 七四六～七四七)

兼雅によれば、自分たちが梨壺腹の皇子を積極的に立坊させようとしなない理由は、正頼の娘たちと藤原氏の男たちが婚姻関係にあり、子どもまで儲けていることであつた。もし、藤原氏が一致団結して梨壺腹第三皇子の立坊を進めてしまえば、正頼が腹を立てて娘たちを自らの邸に閉じ込めてしまふのではないかと心配する。これを聞いた後の宮は、次のように自分の娘を妻にすれば良いのではないかと提案する。

世の中に、女はなきか。それにまさりたらむ人も、おのれ奉らむ。近うは、おのが一人持ち奉りたる女皇子得給へ。さりとも、その女の子どもには劣らじ。
(国譲・下 四七八)

そして、次の場面のように、着々と忠雅を娘女三の宮の婿とする計画を進めてゆく。

かくて、後の宮の思すやう、「同じ日、坊を据ゑずなりぬれば、今は、しにくかりぬべきこと。一の人の心だに一つになしてば、子ども、親に従はざらむやは」と思ひて、彼岸のほどに、よき日を取りて、さるべきことと思し設けて、「后町に、忍びてものせむ。院、聞こし召しても、悪しうものたまはじ、右大将をだによき婿にし給へば。これも、歳もまだ若う、かたちも心も目安し。世の一人にもあれば」など思ほして、太政大臣に、「聞こゆべきことなむある。今宵、ここに、忍びてものし給へ」とあり。(中略)宮、「くちをしよう。いかでか、これ呼び取らむ。天下に、思ふ人持たりとも、わが御子を見奉らむ人は、疎かにはあらじ」と、御心一つに、人には言はで思はず。度々聞こえ給へど、参り給はず。(国譲・下 七五四)
御前に、こなたの御腹の君たち、皆おはするほどに、後の宮は、「このことを、いかで」と思ひて、姫君

を玉のごとく繕ひ磨き奉り給ふべし。「天下の吉祥天女を持たる者の、夷なりとも、わが宮をば」と思しつづ、
度々御消息を聞こえ給へど、かく、病申しをのみしつづ参り給はぬを
(国譲・下 七五九)

後の宮は、傍線部のように、忠雅を婿とすれば、忠雅の息子たちも父に従い、梨壺腹第三皇子立坊に力を注ぐ
だろうと考えた。そして、忠雅と女三の宮との結婚を画策し、波線部のように、たびたび忠雅を要請する。だ
が、決して忠雅は後の宮のもとに参上しようとはしなかった。

後の宮が忠雅を婿にしようとしていることは噂になり、六の君の知るところとなる。

大宮、「いさや。いとあやしきことをぞ、人言ひつるや。まことにやあらむ、『おとどを、あるやむごと
き所に取り籠めらるべし』とや。それこそ、いと恐ろしきたばかりなれ」。北の方、「いづこに、いかが聞
こし召しつるぞや」。『後の宮の姫宮に』とかや。北の方、胸つぶれて、「あな心憂や。さも知らずかし。
ここには、さる気色もなきは、隠さるるにやあらむ。幼き者どもあまた侍るに、まとも見まほしうて侍る
に、さる、名立たる、めでたくおはする所に取り籠められなば、顧みもせじ。いかさまにせむ」と、気色
悪しうて聞こえ給へば、「いさや。さぞ言ふなりつる。確かなることやあらむ」。

(国譲・下 七五五～七五六)

六の君は、藤壺が女御になった祝のために、正頼邸へとやって来る。そこで、大宮から女三の宮と忠雅との結
婚の噂を聞いた六の君は、傍線部のように、幼い子どもが多くいるなかで、今もう一人懐妊している⁽¹⁰⁾と

いうのに、女三の宮のような高貴な人物に忠雅が婿取られてしまったら、自分たちは顧みられなくなってしまふのではないかと不安に思う。そして、一日中思い悩み、忠雅に迎えに来て対面しようとはしない（国譲・下 七五八〜七六一）。六の君は、迎えに来た忠雅に届いた後の宮からの手紙を気にかけて、さらに思い悩んでゆく。

忠雅は噂を知らないため、六の君に弁解することができず、六の君も忠雅と対面して噂の真相を問いたださうとはしない。そのため、六の君の疑念は一気に膨れ上がってゆく。六の君が忠雅からの消息にも返事をしないため、忠雅は六の君が対面しない理由がわからず、「あやし」と思う（国譲・下 七六二）。忠雅のあずかり知らぬところで、女三の宮と忠雅の結婚の噂が流通してしまい、それが原因でさらに忠雅と六の君の溝が深まってしまっているのである。

先の引用部分の傍線部のように、六の君は忠雅が後の宮に婿取られることによって、自身と子どもたちが顧みられなくなってしまうことを懸念していた。これは、あて宮に夢中になるあまり妻子を顧みられなくなった実忠や、俊蔭の娘に夢中になるあまり他の妻子たちを見捨てた兼雅の姿と類似する。

忠雅と六の君の場合も、実忠や兼雅の行動によって犠牲になった子どもたちのように、忠雅と六の君との間に生まれた子どもたちも、父から顧みられなくなってしまう可能性が、六の君の内面にのみ浮上してくる。しかし、次の場面のように、六の君と忠雅の子どもたちは、母と別々に暮らし、父の世話を受けることとなる⁽¹¹⁾。

また、異人、「かの北の方、親のもとに籠り居給へなれば、小さかりし子どもの騒ぐなるをこそもてあつかひてものし給ふなれ」と。（国譲・下 七六三）

むしろ、子どもがいることで、両者の関係はこれ以上悪化しないことが、次の場面からみいだせる。

かくて、太政大臣の北の方、大宮の御もとに渡り給ひて、おとどの御消息あれど、御返りも聞こえ給はず、夜ごとにもし給へど、対面し給はず。宮もおとども、「あぢきなし。童部にもあらず。心の変はり給はむにだに。身一つにもあらず、①子どもあまたあり。かくものし給ふめれば、『忘れ果てじ』とこそ思はめ。かくのたまふめるを、対面し給へ」と聞こえ給へば、北の方、「何か。『あまねう人に知られぬ前に、かしこにも、かうのたまふほどに、おのが心と去り侍りなむ』となむ。これかれ見馴らひてもあるものを、『おのれしも、かしこき心に忘れじ』となむ、ただつきたりし乳母なくて、②懐にのみ馴らひたる子の求め泣くなれば、らうたきに、とざまかうざまにたばかりて迎ふれど、許されぬをのみなむ、いと悲しくは」とて、物も聞こえ給はねば、③おとど、かくやむむことなき折にも参り給はず、君たちをのみもてわづらひ給ひつ、姫君をば、北の方のいと愛しうし給ひしかば、「これ見には、さりとも、渡り給ひなむ」と思しつ、目を放ち給はずまらへておはする、右の大殿の聞き給ひて、「さ思ひしことぞや。後の宮にも、しか聞こえてきかし」と思す。

(国譲・下 七六三―七六四)

大宮と正頼が、忠雅と対面しない六の君を諫める場面である。大宮と正頼は、傍線部①のように、子どもがたくさんいることを理由に、忠雅との対面を六の君に勧める。六の君も、自分に懐いていた娘が自分を求めて泣いているという噂を、傍線部②のように気にかけていた。忠雅も、傍線部③のように、そのような六の君の心情を予想し、可愛がっていた娘を見に六の君が戻ってくるのではないかと、子どもたちの世話に勤しむのだった。

た。

このように、六の君と忠雅、子どもたちの関係は、実忠と妻子たちとの関係や兼雅と妻子たちとの関係を彷彿とさせる。実忠の場合、あて宮に夢中になったために妻子を忘れ、ついには息子の真砂子君を死なせてしまう。兼雅も俊蔭の娘と再会すると、それまでの妻子たちを放ってしまい、妻子たちを零落させてしまう。六の君と忠雅の子どもたちも、あて宮求婚譚によって犠牲になった実忠の妻子たちや兼雅に忘れられた妻子たちと同じように、犠牲になってしまふかのようにみえる。しかし、そうした懸念は杞憂に終わる。

①かくて、太政大臣の北の方は、このことによりてこそ、宮の御婿取りもあべかりしか、今は音もなし、若君達は恋ひ泣き給ふ、御腹はゆくゆくと高くなる、何心もなく出で給ひて、秋の頃ほひ、夜寒に、心細きを、月ごろ離れ給ひて、心細く思す。おとども、夜ごとにおはしつ泣きわび給へば、「いかがせむ」とて渡り給ひぬ。(中略) かくて、②ありしより、御伸いとめでたし。(中略) ③大殿の北の方、御物語し給ふ所。君達、遊び歩き給ふ。女君、御髪、かいしきばかり、いとをかしげにて、雛遊びし給ふ。御達三十人ばかり、童あまた。御前に、人の奉りたる物、いと多かり。(国譲・下 七七八七〜七八八)

傍線部①のように、六の君は子どもたちが自分を恋しがって泣く姿を想像し、またもう一人が育つお腹がどんな大きくなっているのを見て、ここ数か月忠雅と対面していないことを心細く思う。だが、東宮があて宮腹の第一皇子に決定すると、二人の誤解は解け、傍線部②のように、以前よりも親密なものとなった。子どもたちは、傍線部③のように遊び歩くようになり、将来への不安はなくなる。

「忠雅と妻子たちは、実際には一家離散に及ばなかったという点で、兼雅と妻子たちの物語やあて宮求婚譚における実忠の物語とは決定的に異なる。源氏と藤原氏という氏族対立の物語は、立坊が決まらない時点では対立しているかのようにみえるが、最終的には円満な解決に終わる。忠雅と六の君もいったんは不和になるものの、最後は誤解が解け、以前よりも仲が深まり、子どもたちも母と再会して何の憂いもなく遊ぶことができるようになる。」

このように、「国譲・下」巻における六の君・忠雅と子どもたちの物語は、実忠や兼雅一家の物語とは大きく異なる。しかし、実忠や兼雅の物語の反復ともいえるのではないか。実忠や兼雅一家の物語のように、忠雅夫婦の物語では、子どもたちが犠牲になるかと思いきや、実際には子どもたちは「家」や親の庇護下にいる。そして、それは「蔵開」巻から「国譲」巻へと続く「家」を再構成してゆく物語の延長線上にある。

『うつほ物語』の前半部にはさまざまな氏族が登場していた。複数の氏族たちが集まっていたあて宮求婚譚が終わると、それぞれの氏族の求婚者たちは、出家する、流罪になるなど、中心から外れてしまう。または、正頼の婿として源氏の一族に回収されてしまいそうになる。「国譲」巻になって梨壺腹に皇子が誕生すると、源氏と藤原氏の間で政争が起き、物語は源氏と藤原氏の対立が中心となる。とはいうものの、正頼の婿である藤原氏の男たちは積極的に政争に参加しない。むしろ、妻を慮り、政争には消極的である。

六の君は、忠雅が通つて来なくなってしまうのではないかとという疑念にとらわれてはいるが、実忠や兼雅の妻子たちの様子を思い出しているわけではない。当時、男が妻子を忘れてしまう話は多くあった。だが、留意したいのは、前半の実忠や兼雅をめぐる妻子たちの様子と、この忠雅の妻子たちの様子が物語において対比的に描かれていることである。前半部と同じような構造を持ちながらも、後半部の忠雅と妻子たちの挿話は、異

なった結末を迎える。実忠の物語、特に真砂子君の物語を想起させながらも、忠雅の妻子たちは同じ結末をたどることはない。立坊争いが決着をむかえ、忠雅と六の君の關係が修復されることで、子どもたちの未来は保障されるような描き方がなされる。

過去を回想し、過去の問題点を解決しながら、物語には描かれない未来を形成しようとする『うつほ物語』の後半部の特徴が、忠雅をめぐる挿話からも窺うことができる。

三、仲忠と小君

最後に、先行研究でも多く論じられている「楼の上」巻における仲忠と小君の問題について考えたい⁽¹²⁾。「蔵開・下」巻では、仲忠が父兼雅の妻妾たちを三条邸に引き取る。その一連の動きに連なるものが「楼の上・上」巻における小君の引き取りである。「楼の上・上」巻の冒頭は兼雅が通っていた源宰相の娘の話から始まる。

三条右大臣殿の、かの一条殿の対どもに居給へりし御方々、宮迎へられ給ひて、「今は、限りなめり」とて、思ひ思ひに渡り給ひにし中に、西の一の対に、源宰相の、

故郷に多くの年は住みわびぬ渡り川には訪はじとやする

と書きつけ給へりしを、殿おはして、見つけ給ひて、「心深く、をかしう、かたちなどもことなむなかりしを、いかで、こればかりを、あり所を聞かましかば、尋ねてしかな」とのたまへば、尚侍、「いとよきことなり。宮のおはしける所に、あまた、さてもものし給ひけるを、女子もなく、さうぞうしき。所は、広う面白う

めでたきに、もとのやうにてもものし給はば、聞こえ交はしてあらむ」とて、右大将の参り給へるに、「このたまふめること、なほ、御心とどめて尋ね給へ」と聞こえ給へば、「げに、長く」と思す。

(楼の上・上 八二九)

「はじめに」で述べたように、「蔵開・下」巻では、仲忠主導で兼雅の妻妾たちの引き取りが行われていた。その中で、引き取られなかった人々は、各自散り散りになってしまっていた。久しぶりに一条殿に訪れた兼雅は、退去直前に書きつけた源宰相の娘の傍線部の和歌を見て、宰相の娘をたずねたいと願う。俊蔭の娘もそれに賛成し、仲忠に捜索を頼む。

仲忠は、物忌みで訪れた石作寺で、偶然この宰相の君と遭遇する。この時、最初に目にするのが宰相の君の息子である小君だった。

この御局の傍らにとどまりたる人、いと貴はかにゆゑゆゑしき声して、上に、人二人ばかり、下仕へなめり、人^にいたうも隠れで、几帳のほころびより見えたるも、目安し。大徳の、御堂の内より来ためれば、乳母なるべし、さやうの大人大人しき声にて、「この君の御こと、よかんべく祈り給へや。『親におはする殿に知られ奉り給へ』と申し給へ。上いと心苦しうなむ思し嘆くを見奉る」など言ふ。「親子あるにやあらむ。あはれなることなりや。親を見ず知らざらむよ。誰ならむ」と聞き居給ふほどに、八つ九つばかりなる男子、髪もよほろばかりにて、搔練の濃き桂一襲、桜の直衣のいたう萎れ綻びたるを着て、白ううつくしげに、貴にうつくしげなる、化粧もなく、ただ、見に立ち出でて、外の方見立ちたり。よう見給へば、宮の君の

この場面は、兼雅と仲忠の再会と非常によく似通っている。

その日、帝、北野の行幸し給ふ日にて、その山のあたりなど御覽するに、その日候ひ給ふ右大将のおとど、御馬を引き回して、この琴の調べを聞きつけ給ひて、御兄の右のおとどに聞こえ給ふ、「この北山に、限りなく響き上る物の音なむ聞こゆ。琴の声と聞こゆれど、多くの物の音合はせたる声にて、内裏に候ふせた風の一つ族なるべし。いざ給へ。近くて聞かむ」とのたまふ。(中略)分け入りて、この琴の音を尋ねて、うつほある杉のもとにうち寄りて、馬より下りて、見巡り給ふ。この木の前には、よろづの木なつかしう、苔を敷き、砂子を蒔きて、清げなる蔭に立ち寄りて、声作り給へば、このうつほの人、琴を弾きやみて、あやしがりて見給へば、いと清げなる人立てり。子の言ふやう、「いとめづらしく、あやしきわざ顔に似たり。声は、いと貴になまめかしう、愛敬づきて、幼げにも、物など言ふ。いとうつくしげに見給へば、見合はせ給ひて、扇して招き給へば、うち笑みて、ふとおはしたり。内に、いと貴なる声にて、「かれ呼び給へ。かの君は、いづちぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませ。おはしませ」と言へども、聞かず。〔大将、膝に据ゑ給ひて〕「母君は、ここにか」とのたまへば、「おはすめり」。〔誰が御子ぞ〕。「知らず」。〔御父は、誰とか、人は聞こゆる〕。「右の大将」とかや、人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。〔あやしきことかな。西の対の君にこそ。〕「稚兒ありしを、ただ一目見ずて、祖母君なむ、愛しうして取り籠めてし」とのたまひしにやあらむ。いとあはれにもあべきかな。それにやあらむ。なほ、気色見む」と思して

(楼の上・上 八三〇～八三二)

この場面は、兼雅と仲忠の再会と非常によく似通っている。

かな。物の音を聞きて、天人の下り給へるにやあらむ」と言へば、なほ問はまほしくして、苔の簾の内ながら、「かれは、何人のおはしますにかあらむ。熊・狼を友達にて、世の中の人もまうで来通はぬ山懐に、いかで入らせ給へるならむ」。客人、「さればこそ。人ありけり」と思して、「かくて、人住み給ふ」と聞きて、まこと、空言見給へに、まうで来つるなり。いらへ、「この年ごろ、この山に籠り侍れども、かう尋ね訪はせ給ふ人もなきに、何ごとによりてか尋ねおはしましつらむ」と聞こえて、苔の上に出でたり。衣はた、はかなき単衣の姿えたるを着たるに、顔かたちは、ただ光るやうに見ゆ。あやしみ驚きて、客人、「今日は、北野の行幸なり。御供に仕うまつれるに、面白き物の音の聞こゆれば、尋ね参り来つる」とて、行膝を解きて、苔の上に敷き、**「こち」とて据ゑ**、我も居給ひて、**「このよしを問ひ給ふ、」**「そもそも、獣といへど、虎・狼ならぬは住まざなり。鳥といへども、鷲・山鳥ならぬは住まぬ所に、何の御心にて、いと
きなきほどには宿り給ふぞ」。子のいらへ、「この山にまかり籠りにしこと、五歳よりなり。その後、跡絶えて、まかり出づることなし。その籠り侍りしやうは、思ふ心ありてなり。たふたふに聞こゆべきにも侍らず」と聞こゆ。客人、「こころ激しき道に、うち越えて、深き山の奥を、うとましき獣の満ち満ちたる中を尋ねたる心をば、え疎かには思さじ。なほのたまへ」と、責め問ひ給へば、「はかばかしくも、身の上を、え知り侍らず。母に侍る人に、責めて問ひ侍りしかば、『父母に、一度に遅れ侍りにしかば、あひ顧みる人なくて、心細き住まひをし侍りけるに、はかなき人の、物の頼りに立ち寄り給へりしになむ、いささかいらへなど聞こえしに、生まれにし』とばかり語られ侍れども、そも、はかばかしうも聞き侍らず」と聞こゆれば、**ありし京極のことを、ふと思し出でて、**「なほ、確かにのたまへ。さて、その御親はおはするか、おはせぬか。あやしう、のたまふやうにては、いときなきほどより、かかるあやしき所におはし

けれど、さらに、ここにおはすべき人になむ見えぬ。ただ、あらむままにのたまへ」とのたまへば、子のいらへ、「〔後略〕」

(俊蔭 四三～四六)

兼雅は、俊蔭の娘や仲忠の弾く琴の音を聞いて、二人のもとにたどり着くが、仲忠も「いと貴はかにゆゑゆゑしき声」から宰相の君のいる場所に注意を向ける。しかも、両者とも最初に出くわすのは、子どもの方であり、まず子どもと会話することから母子の素性を知る。子どもの服装は、傍線部のように、どちらも衣服が萎え綻びている点において共通している。兼雅は、困いで示した部分のように、仲忠を「こち」と言つて据え、波線部のように仲忠の素性を尋ねる。そして、その答えを聞くと、網掛けで示したように、「ありし京極のこと」を思い出す。仲忠も困いで示した部分のように、小君を膝に据え、波線部のように小君の素性を尋ね、網掛け部分のように、小君の答えを聞いて兼雅の子であることに気づいている。宰相の君母子と俊蔭母子はその境遇の相似が指摘されているが⁽¹³⁾、以上のように兼雅が仲忠に遭遇する場面と仲忠が小君に遭遇する場面もよく似た特徴を持っていることがわかる。

だが、この仲忠と小君との遭遇場面が、兼雅と仲忠との遭遇場面と大きく違うのは、実の父子関係ではないことである。仲忠の場合は、実の父である兼雅と再会して、そのまま父に引き取られるが、小君の場合は異なる。小君は、兄仲忠と遭遇した後に、実の父兼雅と再会する場面が改めて設けられている。小君と兼雅の再会は、仲忠と兼雅の遭遇場面と似通いながらも、実の親ではないという点で大きく異なっている。そのため、仲忠が息子として兼雅の寵愛を受けたのに対して、小君は兼雅を父とせず、兼雅も小君によそよそしい態度をと

る。その代わりとして、仲忠が小君の父代りの役目を果たす。

仲忠は、「蔵開・下」巻において父兼雅の妻妾たちを引き取っていた。宰相の上や小君を引き取ることも、この動きに連なるものである。第二節で確認したように、仲忠は血縁関係なくとも子どもの後見を引き受けている⁽¹⁴⁾。仲忠は、仲頼の息子二人と娘を引き取っており、さらに娘の次期東宮入内の後見をもすることになるだろう。また、梨壺腹の第三皇子も仲忠を母代わりとしており、血のつながっている子ども、つながらない子どものどちらに対しても、仲忠は親代わりとなる。それは、やはり自らが父のいない生活を過ごしていたことと関連するだろう。仲忠は、兼雅の妻子たちを引き取る前、次のように過去を述懐していた。

〔前略〕昔、若くおはしましけむ世には、はかりなかりけむことにつけて、仲忠らが物の心も知らぬを掻き持ては、いかばかりかは悲しび給ひし」と聞こゆるままに、涙は雨のごとくにこぼす。父おとど・母北の方も、いみじう泣き給ふ。

(蔵開・中 五六一)

仲忠は、母俊蔭の娘と自らの過去を思い出し、自分たちの境遇と兼雅の妻子たちの境遇とを重ね合わせていた⁽¹⁵⁾。

俊蔭は、遣唐使に選ばれ、流離することで秘琴を得ることができたが、父母のいる日本から遠く離れ帰国した時には父母と死別してしまっていた。俊蔭の娘は父母と死別していた。その息子である仲忠は、父に誕生を知られぬまま成長するが、兼雅との遭遇によって庇護されることになる。兼雅の妻子たちも、俊蔭の娘や仲忠と同じ道をたどっていることがわかる。兼雅の妻子たちは、後半部において仲忠に救済される。だが、「楼の上・

上」巻になると、中心に語られるのは、妻たちよりも息子小君についてである。

一節目の仲頼、二節目の忠雅の話もその子どもたちの存在が注目されていた。仲頼の場合は、仲忠の尽力によつて子供たちが宮仕えする可能性が語られていた。忠雅の場合も子どもたちの将来が何の不安もないことが予想される結末となっていた。また、本論では詳述していないが、実忠の娘袖君もあて宮の配慮により時期東宮に入内することが示唆されている（国譲・下 七九二―七九四）。本節の小君の場合も同様に、仲忠の過去と同じような構造を取ること、小君の未来が予想できるように描かれている。

おわりに

水尾訪問は吹上訪問を、忠雅と六の君の不和は実忠・兼雅の妻子たちの問題を、小君と仲忠の遭遇は仲忠と兼雅の遭遇を想起させ、過去を反復しているかのような構造を持つ。『うつほ物語』は後半部になると、登場人物たちが過去を頻繁に回想するようになるが、特に「楼の上」巻はそれが顕著に現れる。俊蔭の娘は、京極邸の庭の様子を見て、昔と今を重ね合わせる。このように過去と現在を一体化させるような場面が、「楼の上」巻には多く描かれる。また、以上論じてきたように、後半部の構造は、前半部に描かれた過去を想起させるような作りとなっていた。

これによって、過去は再び現在に蘇ってくる。しかし、それはあくまで過去が現在とは異なることを確認してゆく作業を伴う。俊蔭の娘は、「楼の上」巻において、俊蔭のいた過去を回顧しながら、俊蔭がいない今を再認識する。過去はあくまで過去であり、現在とは異なるものとして対象化される。過去が対象化されると、

もはや過去は現在と完全に一体化することはなく、時間の経過だけが問題となる。物語の最後、嵯峨院と宮内卿兼覧は京極邸において、遠い過去を回想する。しかし、その際に詠んだ歌は、時間の経過を意識したものである。

嵯峨の院、楼の上にさし上りて、「いと厳しき森のやうにて、桜の木あり。あはれ、この木見るこそ、いと恐ろしけれ。昔、十余歳にて、春ごとに来つつ、書見るとて、見困じて下りつつ遊びし。いで、この楼ならば、及びなむや」とて、

春来てはわが袖懸けし桜花今は木高き枝見つるかな（中略）

宮内卿、歳七十なる、「あはれ、昔を思ひ出で侍れば、あの岩のものと松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。七、八樹ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼覧、

引き植ゑし子の日の松も老いにけり千代の末にもあひ見つるかな

（楼の上・下 九四〇～九四一）

嵯峨院と宮内卿は、昔と同じように京極邸に生える桜の木と松の木を見て過去を振り返っているが、すでにその木々は成長し老木となっていた。時間の経過によって、変化した木々を見ることで、過去が現在とは異なるものであることが再認識される。

しかし、このように過去を対象化するのには、過去を持つ人物たちだけである。過去を持たない子どもたちが

今後どのように成長し、過去を捉えなおしてゆくのかは物語には描かれない。もちろん、過去を持つ人物たちによって、仲頼の子どもたち、忠雅と六の君の子どもたち、また小君や実忠の子どもたちの未来は安泰なものになることが予想されるような語り方がなされていた。しかし、『うつほ物語』は、はじめに述べたように人々が分散↓収束↓分散↓収束すること、展開してきた。子どもたちの未来もまた、再度分散し、収束してゆくように思われる。

付記

『うつほ物語』の本文の引用は、室城秀之注『うつほ物語全 改訂版』（おうふう 二〇〇一）に拠るが、一部表記を改めた箇所がある。適宜傍線を引き、（ ）内に頁数を付した。

注

- (1) 前半部を「俊蔭」巻、「沖つ白波」巻、後半部を「葦開・上」巻、「楼の上・下」巻とする説に従う。
- (2) 「子ども」とは、「稚児」や「童」まで、すなわち裳着・元服などの成人儀礼以前を指すが、成人儀礼をする年齢になっても裳着・元服を行わないことも多い。そのため、本論では「子ども」を成人儀礼の平均年齢約十五歳までの男児・女児に限り考察する。本論で「子」と表記する場合は親子関係における子を指し、「子ども」と表記する場合は十五歳までの子どもを指している。
- (3) 以上に述べたものは、拙稿「『うつほ物語』〈孤児〉の物語」（『物語研究』一五 二〇一五・三）において詳しく論じている。
- (4) 「家」については、高橋秀樹『日本中世の家と親族』（吉川弘文館 一九九六）、服藤早苗『家成立史の研究』（校倉書房 一九九二）、栗原弘『平安前期の家族と親族』（校倉書房 二〇〇八）などの歴史的な「家」の変遷

- に関する先行研究を参照したが、『うつほ物語』の「家」は歴史的な「家」の変遷とは異なった面を持つ。『うつほ物語』の「家」に関しては、日向一雅「先祖と靈験―古代物語への一視点―」（『源氏物語の主題―「家」の意志と宿世の物語の構造―）、室城秀之「あて宮春宮入内決定の論理」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房 一九九六）、佐藤厚子「正頼家の成立・〈家〉の世界の形成―うつほ物語藤原の君巻の思想」（『日本文学』一九八五・六）などを参照。また、本論では「家」を、邸や親族、氏族などさまざまな意味で用いているため「家」と表記している。
- (5) 猪川優子「『うつほ物語』 祐澄と近澄―繰り返される〈あて宮求婚譚〉―」（『古代中世国文学』一九二〇〇三・六）
- (6) 注3の拙稿において詳しく論じた。
- (7) 稲貝直子「吹上の宮の世界―『うつほ物語』の「花紅葉」表現との関わりから―」（『日本女子大学大学院の会誌』一八 二〇〇一・二）、門澤功成「『うつほ物語』 吹上上巻の唱和歌（一）―漢籍に基づく景物と和歌の機能―」（『田中隆昭編『日本古代文学と東アジア』勉誠出版 二〇〇四）
- (8) 注7門澤論文。
- (9) 同時に、正頼も滋野真菅一族の流罪を解いている。
- (10) 忠雅と六の君の子どもは、「国讓・下」巻では十一歳、五歳、四歳の男子と七歳の女子の四人おり、その上も一人懐妊している。
- (11) 一節に論じた仲頼の子どもたちも、この節の忠雅の子どもたちも母と離れてしまい、母を恋うことになる。これは、「楼の上」巻におけるいぬ宮と女一の宮との関係に類似する。前半部は主に父恋の物語であったが、後半部は母恋の物語ともいえる。高野英夫は、六の君が忠雅を拒否し子どもを残してきたことと、女一の宮が仲忠を拒否しいぬ宮との離別を嘆いている点が共通していると説き、「共通の要素を持ちながら、正頼家は王権の獲得を志向し、俊蔭一族は秘琴伝授の実現を求めると論じている。
- (12) 猪川優子「『うつほ物語』宮の君と小君―次世代の確執―」（『古代中世文学』一八 二〇〇二・十二）、西山登喜「『うつほ物語』宮の君の登場理由―女一宮の〈母性〉を問う」（『物語研究』七 二〇〇七・三）、戸田瞳「『うつほ物語』俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁の世界―〈縦の繋がり〉と〈横の繋がり〉の絡み合い」（『古代中世文学

- 論考』二三 二〇〇九・一〇）、西本香子『宇津保物語』の藤氏排斥』（『明治大学大学院紀要（文学篇）』二九一九九二・二）。
- (13) 高野英夫「うつほ物語 宰相の君母子の物語の意味―楼の上上巻冒頭部を中心にして」（早稲田大学大学院中
古文学研究会編『源氏物語と王朝世界―中古文学論攷第二十号』武蔵野書院 二〇〇〇・三）、西本香子『宇津
保物語』の藤氏排斥』（『明治大学大学院紀要』第二十九号 一九九二・二）などに詳しい。
- (14) こうした仲忠のあり方は、大井田晴彦「忠こそ物語の位相―仲忠との出逢い―」（『うつほ物語の世界』風間書
房 二〇〇二）において詳しく論じられている。
- (15) この点については、注3の拙稿においても軽く触れた。

The Narrative Structure of the Children's Episodes in the latter part of Utsuho Monogatari :

Relationship between the first part and the latter part

TOMIZAWA, Moemi

This paper attempts to discuss the scene and structure of the latter part, from kura-biraki-jo chapter to rou-no-ue-ge chapter, in Utsuho Monogatari. I first look into the visit to Mizu-no-o, and next try to analyze the succession to the throne of kuni-yuzuri chapter, and finally in the last section and then discuss the problem of Ko-gimi, and finally in the last section I state the conclusion. I can summarize the results as follow: the scene and structure of the latter part is portrayed as a repetition of the first part of the story. Consequently, the latter part of Utsuho Monogatari has a narrative structure that objectify the past.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)